文・安西　均
絵・桂ゆき子

万葉ドライブ

有峰書店

文・安西　均
絵・桂ゆき子

万葉ドライブ

有峰書店

万葉ドライブ　一九六九©

昭和四十四年五月二十五日印刷
昭和四十四年五月三十日発行
定価　七八〇円
著者／安西均・桂ゆき子
発行者／酒井節雄
発行所／株式会社有峰書店
東京都中央区銀座五丁目十ノ十三　倉田ビル
電話／東京五七一―一四八七
振替／東京八二九一〇番
印刷／三ツ木株式会社印刷部
製本／有限会社井上製本所

万葉ドライブ

古い民謡歌の、血の音

宮　柊　二

万葉旅行で、三輪山の山沿いの田の畦道をわたりながら、「なぜ、遠いむかしの、こんな土地が、現代人に懐しいんだろうねェ」と、前を行く友の背へ声をかけた。返事がない。それでもう一度、「どこの土地でも歴史があるわけだけれど、詩歌で印象されるのと、歴史だけを持つのとは違うのかねェ」と、尋ねた。すると、「もうひとつあると思うよ、自然環境が。自然がこうして残っているんだもの。山も川も跡かた無くなっていて、ビルだけというのでは懐しく無いよ」という返事がかえってきた。そのとき、納得し、了解した一事があった。

この書の、つまり万葉集の東国歌の多くを生んだ土地の自然は、それを尋ね巡った詩人の安西さんと画家の桂さんの前に、新鮮な感動を伴なって現われて来たようだ。東国歌は都の官人の少数の作をふくむが、おおむねは、東国の民謡である。民

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

謡は、自然と風土が養った人情と環境を血とする。安西さんと桂さんのこの「万葉ドライブ」が新聞に連載されていた当時、私は愛読し、それの持つ不思議な魅力をときに不審としたりしていたのだったが、その不審への納得と了解が、大和の畦道で、不意に来たという次第であった。

安西さんは、詩人のするどい直感で、古い歌に走っている、その血の音を聞いてしまったに違いない。その音に、とらわれたのに違いない。そうでなければ、こんなに書きこむまで、歌の跡の自然を尋ね巡ってゆくことはない。桂さんのスケッチの背後から、安西さんの筆は、遠世の自然のたたずまいと、その生活と人の声とを、近隣のそれのごとくに聞かせてくるのである。

文と絵の二つながら、実に魅力の深かった「万葉ドライブ」が、再現する。たのしくてならず、一筆した。

古い民謡歌の、血の音　宮　柊二

望郷の思い誘う峠　足柄の御坂　一四
神仕えの夜の情事　葛飾　一六
岩崩れに託す女心　見越の崎　一八
民謡に残る難所　足柄峠　二〇
手織り布さらす　多摩川　二二
伊豆の海と出湯　土肥の河内　二四
防人が越えた丘陵　多摩の横山　二六
防人が別離の悲歌　足柄の御坂　二八
薪取りの恋の歌　鎌倉山　三〇
国府台下に迫る海　葛飾の真間　三二
針に託す妻の愛情　武蔵国橘樹郡　三五
満潮が気になる夫　美奈の瀬川　三八

山に粟作り恋実る　箱　根　四一
幼き者への愛情　橘の古婆　四四
今では安産の神　真間の手児奈　四六
決め手がない地名　海上潟　四九
家の言づてもなく　上総国朝夷郡　五三
水をくみ恋を語る　真間の井　五四
兵士、別離の悲哀　上総国長狭郡　五七
川べりの〝幻の港〟　麻久良我　六〇
洲のかげで舟泊り　海上潟　六三
皇居の濠の水鳥　武蔵野　六六
名を呼んで泣く　相模嶺　六八
素朴な美女伝説　真間の手児奈　七〇
蓴菜に託す恋の歌　おほやが原　七三
川舟とロマンスと　古　河　七五
鈴ケ森、別れの歌　荒藺の崎の笠島　七八
出征する夫に泣く　上総国市原郡　八〇
古代紫いまいずこ　高　麗　八三

伝説の美女と結ぶ　八五
手枕を貸そうよ　八八
浮名はせた遊女　九一
相見ての後の思い　九四
誘うたらおいで　九六
妻との悲しき別れ　九九
故郷をおもう防人　一〇三
古代に繁栄の土地　一〇五
武運長久を祈る　一〇八
砂浜とおとめたち　一一一
ウケラの花と恋　一一四
山の雲に思う面影　一一七
母恋う防人たち　一二〇
離れてつのる恋心　一二三
海人たちの輪唱　一二六
長旅の安全祈る　一二九
雉の姿も悩ましい　一三三
真間の継橋
足柄のまま
末の珠名
御宇良崎
安房
上総国天羽郡・種淮郡
上総国長柄郡
上総国望陀郡
鹿島の神
洵綾の浜
武蔵野
足柄の峰
上総国武射郡・山邊郡
馬来田の嶺
伊豆の海
阿須波の神
子持山

旅の難儀を思う　一三五
農民の愛情にじむ　一三八
恋のスリルを誇示　一四一
風はすぎ行くが　一四四
東むすめの歌碑　一四七
神につかえる夜　一五〇
山間の仕事場の歌　一五三
郷愁さそう流れ　一五六
噴煙のような恋　一五九
椿の花に託して　一六二
雁に託したい慕情　一六四
山路もいとわずに　一六七
子にも妻にも別れ　一七一
この屋根の下に　一七四
集団入隊の宣誓　一七七
歎きにかすむ山　一八〇
今も水湧く遺跡　一八三

足柄の八重山
東歌の馬
続 東歌の馬
小菅ろの浦
利根川
新　菅
かけ山
久慈川
富士の高嶺
武蔵国荏原郡
常　陸
富士の嶺
下総国葛飾郡・印波郡
武蔵野郷土館にて
相模国の防人
富士の山傍
曝　井

娘の親に叱られる　横　山　一八六
故郷の山に寄す　筑波山と防人　一八九
母に逆らっても　駿河の海　一九三
まだ遂げぬ男の心　都留の堤　一九六
恋の待ちぼうけ　富士の柴山　一九九
若芽のような娘　千葉の野　二〇三
遙かな国への想い　東の坂　二〇四
民謡化した防人歌　碓　氷　二〇六

同じ風土が生む——東歌と防人の歌　二〇八
万葉日和にめぐまれて——あとがき　二一九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

都・県別目次

［両地域にまたがる場所（例・足柄峠）および地名でないもの（例・新嘗）は、スケッチ場所によつて分類した］

東京都

多摩川　三

多摩の横山　二六

武蔵野　六六・二四

荒薦の崎の笠島　七八

埼玉県

葛飾　一六

麻久良我　六〇

おほやが原　七二

千葉県

葛飾の真間　三三

真間の手児奈　四六・七〇

海上潟　四九・六三

上総国朝夷郡　五三

真間の井　五四

小菅ろの浦　一四

武蔵国荏原郡　一六一

武蔵野郷土館にて　一七四

横山　一八五

高麗・　八三

新嘗　一五〇

上総国長狭郡　七七

上総国市原郡　八〇

真間の継橋　八五

末の珠名　九一

安房　九六

上総国天羽郡・種淮郡　九九
上総国長柄郡　一〇二
上総国望陀郡　一〇五
上総国武射郡・山邊郡　一一〇
馬来田の嶺　一一三
阿須波の神　一一九
下総国葛飾郡・印波郡　一一七
千葉の野　二〇三

茨城県
古河　七五
鹿島の神　一〇八
久慈川　一五六
常陸　一六四
曝井　一八三
筑波山と防人　一八九

群馬県
子持山　一一三
東歌の馬　一一六・一二一
利根川　一一七
東の坂　二〇四
碓氷　二〇六

神奈川県
見越の崎　一八
土肥の河内　一二四
鎌倉山　一三〇
武蔵国橘樹郡　一三五
美奈の瀬川　一三八
箱根　四一
橘の古婆　四四
相模嶺　六八
足柄のまま　八八
御宇良崎　九四

淘綾の浜　二一
足柄の峰　二七
足柄の八重山　二五

静岡県
足柄の御坂　一四・二八
足柄峠　三〇
伊豆の海　三六
富士の高嶺　二九

山梨県
都留の堤　一六

かけ山　一三
相模国の防人　一七

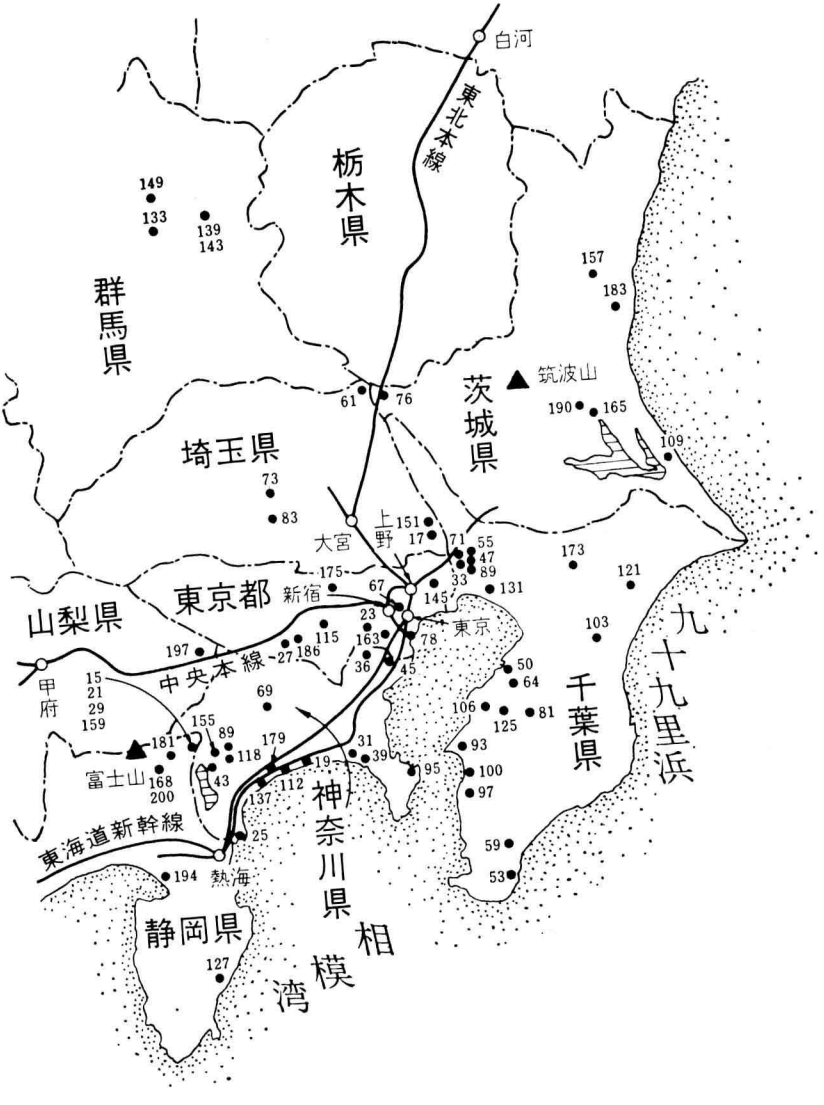
富士の嶺　一六七
富士の山傍　一八〇
駿河の海　一九二
富士の柴山　一九九

凡例

・万葉の地名と人名のルビには、旧カナづかいを用いた。
　例　東(あづま)の国・末(すゑ)の珠名
・国名は、必要なかぎり万葉時代の訓(よ)み方をつけておいた。
　例　上総(かみつふさ)　下野(しもつけの)
・各項末尾の数字は、新聞掲載日。

スケッチの場所一覧図

（数字は本文中のページ）



万葉ドライブ

文・安西　均
絵・桂　ゆき子

望郷の思い誘う峠

足柄の御坂

あしがらのみさか

足柄峠といえば、ハイキング好きの人にはなじみのコースだろう。富士がすばらしい。

峠の頂上を「足柄公園」とよんでいて、正確には静岡県駿東郡小山町足柄に属するが、すぐ東側の登り道は、神奈川県足柄上郡南足柄町。

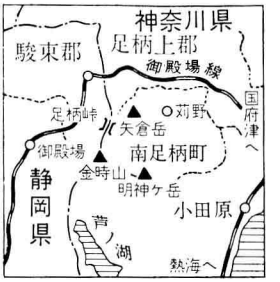
私たちの車は、その足柄上郡山北町の小学校下から南に乗入れ、苅野を西へ、矢倉沢をすぎ地蔵堂。そこまでは、まあ、バスも来ていたから楽だった。

地蔵堂からが万葉の古道「足柄の御坂」にさしかかるので、ハイヤーも首を振り、あえいだ。歩くと一時間の山坂。

中世以後は、東海道が箱根山越えをするようになるが、古代は相模(神奈川県)から駿河(静岡県)に越えるため、この坂で息を切らせた。北側に矢倉岳、南東に金時山・明神ヶ岳が壁をつくっている。

足柄の御坂にちなんだ万葉歌の一つに、田澪福麿という大和の役人が、行きだおれの男を見かけてうたった長歌がある。

歌の大意は――『垣の内の麻を引抜き、干して、妻が作ったのだろう、その着物のヒモも解かず、



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com